

豊田芙雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(4)

—芙雄の生い立ちと結婚と学問修業—

前 村 晃

A Study on TOYODA Fuyu and Beginnings of Kindergarten in Japan(4)

Akira MAEMURA

要 旨

豊田芙雄^{ふお}は、弘化2年(1845)10月21日、幕末動乱期の水戸藩桑原家に生まれ、冬と名付けられている。父桑原治兵衛信毅は水戸藩の藩主徳川斉昭の信任厚い藩内有数の武士であり、彰考館総裁の豊田天功とは特別に親しい学者でもある。母ゆき(雪子)は、儒学者で彰考館総裁を勤めた藤田幽谷の次女であり、幕末尊王派の志士たちの精神的支柱となった藤田東湖の妹である。江戸期には「女に学問はいらない」という観念が支配的であったが、公家や大名家だけでなく、士族や豪農、豪商の家庭でも女子に読み、書き、作歌などの素養を身につけさせたことは珍しいことではない。

冬も幼少期から手習いをするがそれに加えて父や兄からあるいは塾に通って和漢学を学び、母からは早くから詩歌の読み聞かせをしてもらうという優れた家庭教育環境の下で育っている。また、冬は師について書道、女礼式、薙刀、裁縫なども学んでいる。

ただ幕末の水戸藩は尊王攘夷派の天狗党と守旧派の諸生党とが激しく対立し、しばしば内乱状態を招いており、冬の夫小太郎も藩の者の手によって暗殺されるという悲劇を生んでいる。夫の死後、冬は芙雄の名前を用いるようになり夫の遺志を継いで、さらに学問研鑽に励むことになるが、そのことは芙雄が当時の女子最高学府の教育者として抜擢され、日本人幼稚園保姆第一号となる因となるのである。

1. 家庭教育環境と水戸の騒乱

1.1 誕生と家庭環境

本稿の目的は、わが国最初の幼稚園保姆となり、未知のフレーベル主義保育と格闘し、明治初期にそれを定着させることに功労があり、また、後には長い期間わが国の女子教育に貢献した豊田芙雄が、どういう時代に生まれ、どういう家庭環境の中で育ち、成人となっていったのか、また、そうした環境が芙雄の

生き方にどういふ影響を与えたかを明らかにすることである。

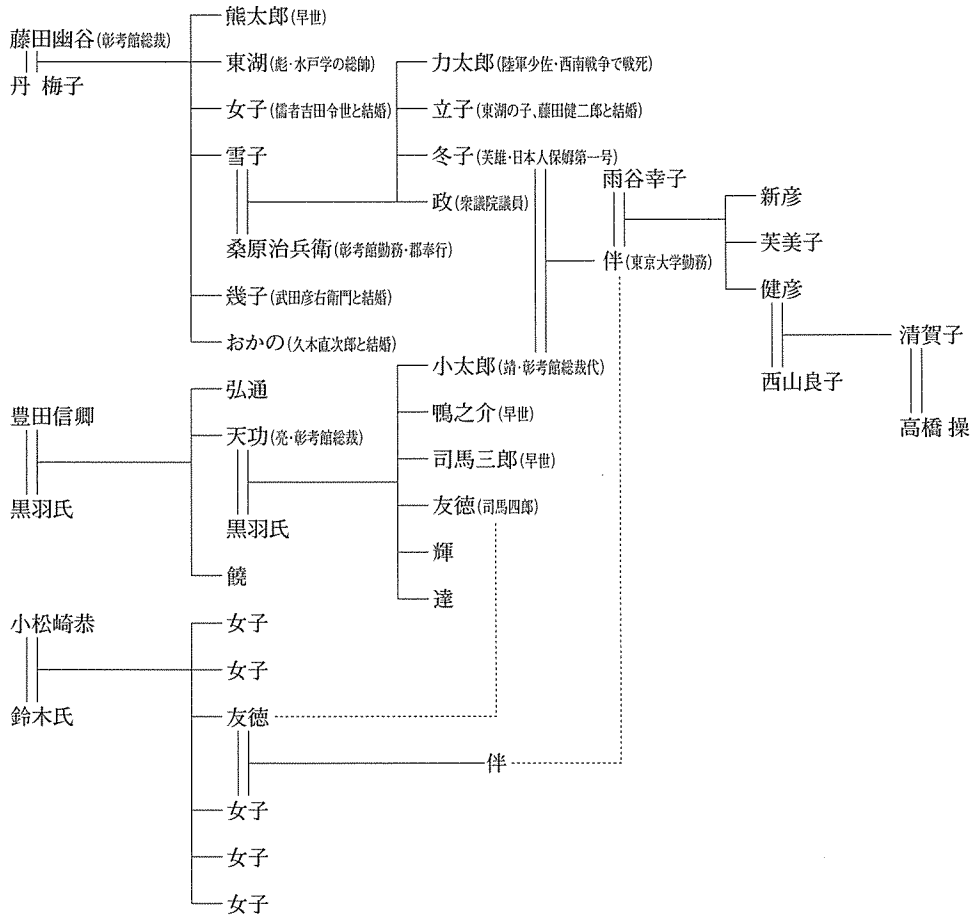
豊田英雄は、フレーベルが一般ドイツ幼稚園を創設して5年後、弘化2年(1845)10月21日、水戸の藤坂町(現水戸市五軒町3丁目)の桑原家に生まれ、冬と命名されている。(本稿では、原則として、冬から英雄への改名期までの事柄に関する記述に際しては「冬」を使い、その後の事柄や生涯全体に関わる記述については「英雄」を用いることにする)

冬誕生の前年、弘化元年(1844)、徳川斉昭は幕府から隠居謹慎を命ぜられるが、この難は斉昭の無実運動を展開する周辺の人々にまで及び、同年、藤田東湖には蟄居が、翌年の弘化2年(1845)には、天功に逼塞が、翌々年の弘化3年(1846)には、冬の父桑原治兵衛に蟄居が申し付けられている。

桑原家の五軒町の屋敷は没収され、一家は楓小路の小さな家に住むことになる。また、父治兵衛は別に中町の方に幽閉されることになり、雪子や冬らは日陰者として楓小路でひっそりと暮らすことになる。冬は日本のまさに幕末動乱の渦中に生まれたのである。

次に示すものは、豊田英雄関係の系譜であるが、母雪子は藤田東湖の妹であり、結婚した小太郎は豊田天功の長子という、幕末の水戸でも、最も恵まれた知的環境にあったといえる。

藤田家や桑原家では女性にも教育を受けさせたが、それに加えて、ここに掲げた系譜を見れば明らかのように、冬の周辺には知的で教養豊かな人々が数多くおり、それが特別に冬の学問修行、人格形成に大き

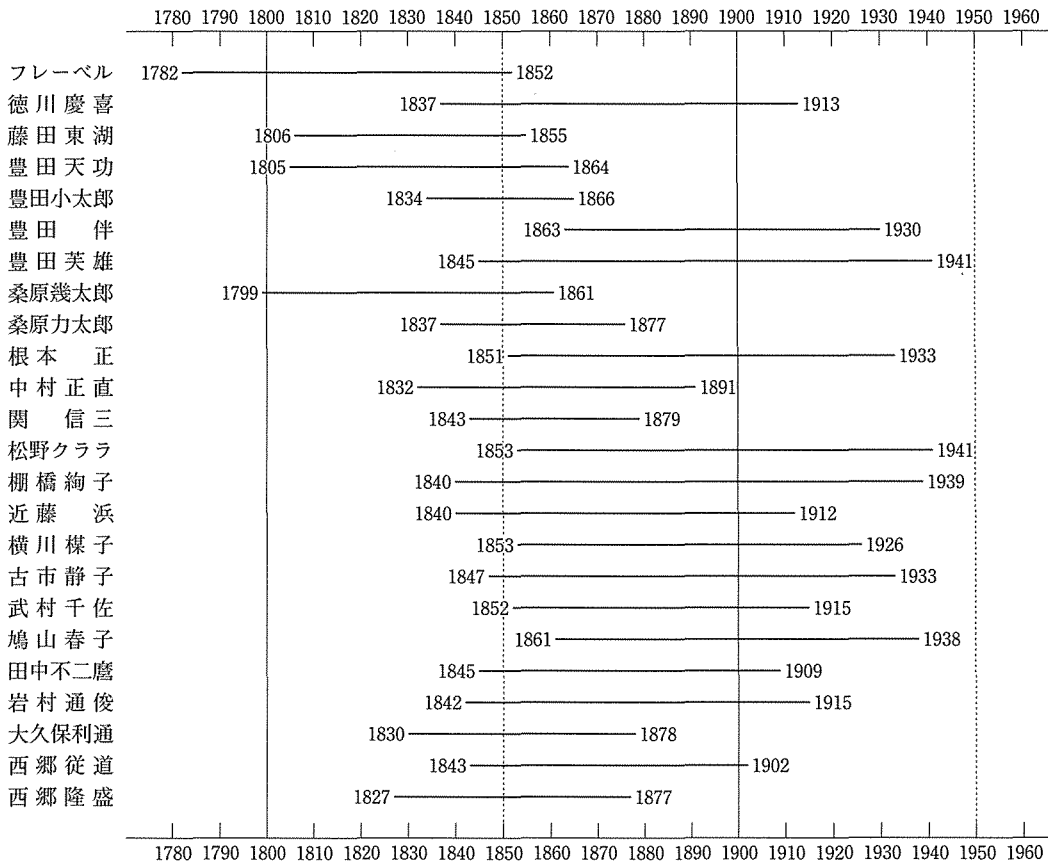


《豊田英雄関係略系譜》

(安 省三の桑原家の系図⁽¹⁾と茨城県歴史資料館⁽²⁾の豊田家を中心とする系譜を参考に作成)

な影響を与えたものと思われる。

次の表は、先の系譜と合わせて参照できるように豊田英雄の生涯に直接、間接に関わりのあった人々の生没年を表したものである。



《豊田英雄関係者生没年比較表》

冬の父治兵衛は通称を幾太郎といい、諱が信毅、号が照顔堂であるが、前田香径氏の研究^③によると士との書状などに用いる隠し名としては綜、操、曾、曹、漕、宗玄、総弦、黄、黄葉、巷他多数がある。「新聞いはらき 英雄號」^④において、英雄が語るところによると、治兵衛は、徳川光圀時代に「大日本史」を編纂するために設けられた、水戸藩彰考館に勤め、長沼流の兵学を修め、国学に通じており、水戸藩の郡奉行をつとめている。

治兵衛は氣根の良い人だったようで常に筆を執り、多数の筆写物、著作物が長持に一棹ほどあったが、水戸火災で皆焼けてしまい、たまたま妹の婚家に預けていた『武山陵考』だけが残り、「大日本史」の資料となったということである。

また英雄は「祖父の治右衛門は烈公の御息女雪姫様の御附士として鷹司様に上り九年間京都に在りましたので父治兵衛も折々京都に赴き諸所の山陵を拝してはその荒廃を嘆きました」^⑤と語り「後治兵衛亦藩命に依り雪姫様の御附士として三年間京都に勤め一注；前村による中略一殊に大和畝傍山の神武天皇御陵の荒廃については慷慨し、當時水戸彰考館總裁豊田天功と屢、書を往來して之が對策を講じたことがあります」^⑥と語っている。

吉田松陰は水戸学を学ぶために一カ月間水戸に滞在したが、嘉永5年（1852）正月には、水戸学の権威

の一人桑原幾太郎（治兵衛）を訪ねている。松陰は「特に桑原幾太郎からは、外敵が日本のどこを侵犯してもそれは神州全体の問題だと諭され、初めて目覚めた」⁽⁷⁾と語っている。冬の父は若き吉田松陰を諭しているのである。また、この時の縁もあって、松陰が長州藩の獄に入れられた折り、天功が松陰を獄から解放するよう動いたことは、松陰関係者の良く知るところである。

それから7年後、松陰は、安政6年（1859）10月17日、安政の大獄で斬首刑に処されている。冬15歳の時であるが、この時期は治兵衛も冬も江戸滞在中であったと思われるので、桑原家でも松陰の処刑は話題となったことであろう。

既述のように、母雪子は藤田幽谷の次女であるが、漢学、国学共に明かった幽谷は男女を問わず自分の子どもらに学問を仕込んでいる。

幽谷の娘たちについていえば、長女は国学者吉田令世に嫁ぎ、次女は桑原治兵衛に、三女は久木直次郎に、四女は武田耕雲齋の長子彦右衛門にそれぞれ嫁している。久木に嫁した三女は特に学問に優れており、御殿に上がり、紫式部の異名を取って、烈公から度々書物などを賜った、と英雄は語っている。

もちろん母雪子も「女ながらも相當の學問」⁽⁸⁾があり、常磐神社の小川宮司が語るところによると⁽⁹⁾、和歌を能くし、筆跡も巧みで、正直快活で、質素を旨とし、子どもの教育には厳格だったようである。英雄の生涯にわたる言動を見ると性格的には母雪子とそっくりだったといえるのではなかろうか。冬はこの母の下で幼い頃から詩歌などを読み聞かされて育っている。また、冬は幼少期には常磐ノ小路の柴田政衛門夫人について手習いをしている。

幼い頃、母雪子から詩歌を読み聞かされたことは、「やまとことば」の持つ柔らかい音の響きと格調の高さを、冬の身に染み込ませることに繋がったのではないかと思われる。英雄は最晩年に至るまで和歌を作り、弟子も多いが、特に幼稚園教師時代には、宮内省の令人たちの協力を得ながら、保育唱歌（ほいくしょうが、洋風唱歌までは、しょうがと濁る）の訳詞、作詞にその才能をいかんなく発揮している。

冬が手習いを始めたのは5、6歳の頃かと思うが、伝えられているように、それより少し早く始めたとしてもおかしくはない。中村正直などは3歳から句讀や書を学んだというから、必ずしもすべての子どもが当時通例となっていた、6歳の6月6日を待って手習いを始めた、というわけでもないのである。

冬はやや長じて、安政5年（1858）14歳の時から慶応2年（1866）まで深作治十夫人の筆子についてさらに裁縫、作法等を学んでいる。

また、当時、武家の女性の間でも薙刀を習うことは多くはなかったが、冬は水戸の市三丁目の鈴木長太郎に3年間薙刀を学び、後に江戸滞在時には新井源八郎の家の者から穴沢流薙刀を習ったようである⁽¹⁰⁾。

冬のきょうだいは多かったが、早世した者を除くと、兄と姉と弟がいる。もちろん、桑原家では幼い頃から力太郎、政に武家の男子として必要な教育を受けさせており、力太郎、政共に秀才であったが、特に政について、山川菊栄は、祖父青山延寿の塾中でも指折りの秀才であったことを記述している⁽¹¹⁾。

兄力太郎は後に陸軍少佐となり、西南戦争時、大隊長として奮戦するが田原坂近くの木留の闘いで戦死する。姉立子は冬に勝るとも劣らない学問教養の持ち主だったそうであるが東湖の子藤田健二郎に嫁している。

弟政二郎（後に政と改名）は工部大学校（後東京大学工学部と合併）の鉱山科二期生として、明治13年（1880）に卒業しているが、教授補をつとめた時期もあり、明治15年（1882）8月、『工学叢誌』（第十巻）に「釜石鉱山景況報告」を書いている。

政の先生は日本地震学の祖ジョン・ミルンである。政の一年上級の工部大学校一期生の中には志田林三郎（電気・通信技術功労者）、辰野金吾（建築家）、高峰讓吉（化学者）などがある。

工部大学校の初代校長（工部省役人と兼務）は鉾山開発に熱心だった大鳥圭介である。大鳥は、榎本武揚、土方歳三らと共に、箱館戦争で官軍と戦った硬骨漢であるが、榎本同様、黒田清隆に許され、新政府の官僚となっていたのである。大鳥は、後、外交畑を歩むが、後年、政が鉾山関係の仕事で天津に派遣された時は、自身の鉾山重視論の発展と見て大喜びしている。

政は、学究畑を歩まず、実業家として活躍するようになり、明治40年（1907）3月1日、大阪高等工業学校（現大阪大学工学部）校長安長義章、機械科長鶴見正四郎らの勧めで、岡 実康、竹内善次郎らと共に発動機製造株式会社（現ダイハツ）を創設している。また、明治炭鉾社長なども歴任している。安長と岡は工部大学校で政と同期で、二人は機械科出身である。

政の娘しげると結婚した村山令蔵も発動機製造株式会社（現ダイハツ）の取締役をしており、後に、桑原商会の社長をしている。

実業家の一方で、政は、水戸選出の衆議院議員となり、明治36年（1903）の「奉答文事件」に際しては、中正党33名の代表として異義申し立てをしている。（政の情報については原稿末尾注参照）

母雪子は政二郎を生んで間もなく安政3年（1856）8月19日に亡くなっている。冬12歳の時である。父治兵衛は常に多忙な人であったが、晩年に閑職となった折りには、冬に經書の講義をすることなどもあったことを先述の小川官司や山川菊栄が述べている。この父治兵衛も、文久元年（1861）10月10日、冬17歳の時に、62歳で亡くなっている。冬は10代で両親を失っているのである。

女子も6歳頃になると手習いを始めるのが普通である。山川菊栄は母青山千世（水戸藩出身・東京女子師範学校一期生）の女の子の塾における手習いを次のように紹介している。冬の手習い時代の様子については詳しくはわからないが、冬の場合も塾での一通りの手習いは次のようなものであったはずである。

（お師匠さんは）お手本を書いてあてがい、娘たちは真黒な草紙に手習いして、ときどき御清書を出す。それでよければまた次のお手本をあてがわれるのでした。ここも夏冬ともに朝は早く、弁当持ちで、昼過ぎまで手習い、手習い、手習いの一方です。遊び時間もなければ唱歌も体操もなく、大きい子も小さい子も同じように手習いばかりしていることは男の子の塾と同じこと。飽きれば勝手に休んだり、遊んだりしてまた始めるという調子。

女の子の習うものは大体きまっています、まずいろはを習い、それから百人一首、女今川、女大学、女庭訓、女孝経といったような—これらを一まとめに和論語といたしました—まずよみ方を、それからそういうものを書いたお師匠さんのお手本を習い、次々にあげていくのです。もちろん平仮名ばかり。平仮名も変体仮名が多く、続け字で、読みにくい上に、言葉の中身も七、八ツの子に分かるはずのないものですが、ただ夢中で習いました。中には東海道五十三次の宿の名を歌のように綴ったもの、また「大名づくし」といって大名の苗字を並べたものをお手本で習いました⁽¹²⁾。

また、手習いを終えた女の子は12、3歳になると、裁縫、作法などを習うことになるが、藤田幽谷家や桑原家などではこれらの他にさらに深い和漢学の学問を習得する機会を与えたのである。安 省三は冬の学問の内容を次のように述べている。

先生は元來読書がすきであつた。大学中庸論語等は照顔齋（父治兵衛の号）に学び、孟子あたりは独り読みをした。經書や日本外史、太平記など殊に面白く読み、更に史記、漢書等もよんだというから相当なものである。古事記、日本書紀、続日本書紀は勿論、古今集などはそらんじた。

之は決して誇張ではない。千べんから繰返してそらんじたという。今の人の努力とは話にならない。

之は外祖父に当る幽谷の教育思想に思い当るのであって、幽谷の暗誦を重んじた教育の影響であろう⁽¹³⁾。

また、世の中がいくら落ち着いてきた時期の冬の学びぶりについて安省三は次のようにも記述している。

管政友先生には時に面接して読書の不審を正したり、学者という学者には意見の交換をして自己の研鑽につとめた。世が改まるにつれ福沢諭吉の西洋事情、学問のすすめ、なども借り読みをするという工合で、当時文明の先端を進むことを怠らなかった⁽¹⁴⁾。

冬は優れた家庭教育環境下で生まれ、両親の理解もあって、早くから教育の機会を得ることができたが、本人の優れた資質もあいまって特別に学問好きな少女となる。

もちろん、冬の前半生は決して平坦な道程ではなかったが、学問研鑽を積んだことによって、維新後の新時代と果敢に切り結ぶ女性に育ち、当時の第一級の政治家、思想家、教育者らと出会うことにもなるのである。

冬は、後年、西園寺公望、徳川篤敬、西郷従道、岩村通俊、田中不二麿、中村正直、関信三（元太政官スパイ・幼稚園教育功労者）、宮川保全（数学者）、浅岡一（教育者・信濃教育会功労者）、棚橋絢子、松本荻江、武村耕靄（閨秀画家）、永井久一郎（永井荷風の父）、那珂通世（東洋史学者）、松野クララ、近藤浜、横川榎子、荻原吟子、青山千世、鳩山春子（現共立女子大学創立者の一人・鳩山一郎の母）という、錚々たる先輩、同僚、後輩と交流を持つことになるのである。

特に、松本、武村、近藤、横川、荻原、青山、鳩山ら女性陣は、冬と同じように、幕末に生まれるが、少女時代から学問が好きで、冬と似たような人生を歩んでいる。

また、正規の武家や学者の家に生まれなくても、たとえば、棚橋や横川のように、商家や八王子の千人同心（元武田武士の集団であるが、幕府は、千人同心による度重なる正規武士取り立て申請を取り合わず、半農半士の状態に据え置いていた）の家に生まれた場合でも、経済的な余裕と、親の理解があれば、幼い頃から学問と接する機会を得て、特別に学問好きな少女として成長している。

棚橋は、明治初年、名古屋の女子小学校の教師（校長）をしている折り、東京女子師範学校開校時の教員として抜擢されたという点でも、豊田英雄の場合と良く似ている。

横川は、給費付きの保姆見習生として東京女子師範学校附属幼稚園に入学を許され、豊田英雄らの保育法の理論、実践を学ぶが、修了後は同幼稚園の保姆として採用されていて、英雄との関わりは深い。

この二人については後にも触れることになるが、学問に傾斜した当時の若い女性の姿の一端を見るために二人の例を取り上げて置く。棚橋絢子の伝記⁽¹⁵⁾をもとに絢子の少女時代を紹介すると次のようになる。

絢子は天保10年（1839）2月24日、牛尾田庄右衛門の長女として生まれ、幼名は貞とっている。祖父與曾兵衛は変わり者で、稼業にあまり熱心でなく、学問風流の道を好んでいた。この祖父は儒者越高洲に漢籍を、有賀長隣に和歌を、森祖仙に書を学んでいる。祖父と同じく絢子の父庄右衛門も学問好きで祖父と同じ師の越高洲の門人となるが、庄右衛門は商売の方も熱心であったようで傾いていた商家を建て直している。

庄右衛門はもともと「女に学問はいらない」という自説を持っていたが、6歳になった娘が優れた資質を持っていることを知ると、深夜密かに絢子に学問を教えることになる。絢子は14、5歳になる

頃には四書五経をほぼ読み終えていたようである。

また安政元年（1854）16歳になった年には、うわべは実弟善之助の付き添いというかたちで儒者奥野小山の門に入って学ぶことになるが、同時に三瓶信庵について書を学んでいる。

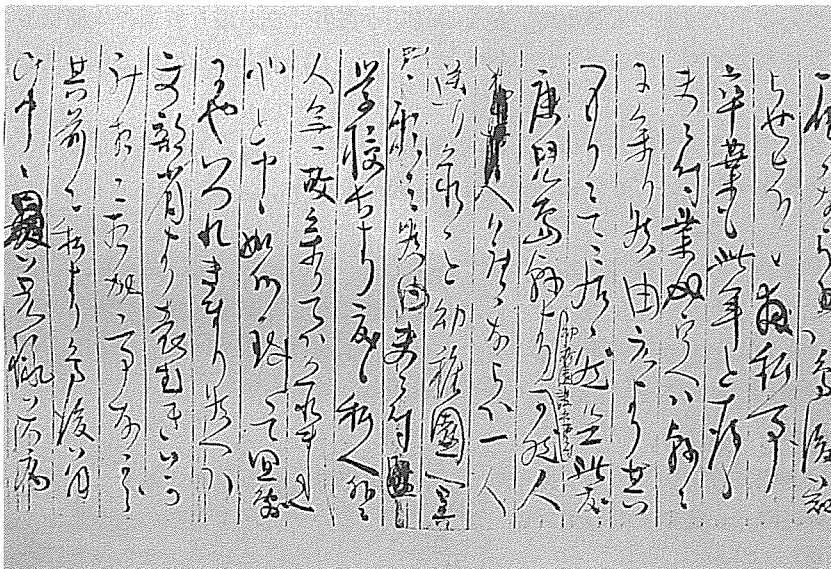
絢子は安政4年（1857）19歳の時、奥野小山を媒酌人として、二本松藩の大阪蔵屋敷留守居役の棚橋新吾衛門の長子大作と結婚することになる。棚橋大作は大阪でも名前の知られた優秀な学者であったが、17歳の頃から目を患い、25歳の時には完全に失明していた。棚橋大作は品行も良く、学問に対する情熱もあったため、絢子は自ら進んで大作と結婚することになる。

横川楳子は、嘉永6年（1853）1月、武蔵国多摩郡横川村（現在の八王子市横川町）に千人同心横川高德の娘として誕生している。楳子の履歴書⁽¹⁶⁾によると、明治11年（1878）2月に東京女子師範学校の保母見習生になるまでの学業の足取りは次のようである。

- 一 文久元年ヨリ元治元年迄四ケ年間阿部完堂ニ従ヒ漢籍素読並ニ習字修業
- 一 慶応元年ヨリ慶応三年迄三ケ年間芝藤太郎ニ従ヒ漢籍修業
- 一 同二年ヨリ三年迄二ケ年間高橋石齊ニ従ヒ習字修業
- 一 明治三年ヨリ五年迄三ケ年間長崎県士族大竹政正ニ従ヒ漢籍修業千葉県平民丸東ニ従ヒ筆算開方迄修業
- 一 同八年ヨリ十一年迄四ケ年間東京府平民馬淵近之尉ニ従ヒ筆算平三角迄修業

横川の場合も9歳頃から漢籍素読を始めているが、その学業は、当時の女性がほとんど学ぶことのなかった洋算にまで及んでいる。明治9年（1876）頃、横川楳子が残したノートには、大量の二次方程式を解いた跡が記されている。

こうした素養があったからこそ、東京女子師範学校附属幼稚園は横川を月5円の給費付の保母見習生と



写真(4)－1 横川楳子の両親宛の手紙（横川家文書・八王子市郷土資料館⁽¹⁷⁾）
（中村校長から鹿児島行をすすめられている）

して入学を許可したのである。

横川は、明治11年（1878）12月6日付の両親宛の手紙（写真）に見るように、幼稚園設立のため鹿児島へ派遣される予定であったが、経緯は不明であるが何らかの事情により、結局、英雄が鹿児島へ赴くことになり、横川は、保姆見習生修了と同時に英雄の欠員を埋めるために、東京女子師範学校附属幼稚園に採用されるのである。この辺の事情については、詳しくは、後に、記述することになる。

もちろん、こうした学問好きな少女たちもごく幼い時期には勉強ばかりしていたわけではない。幕末の水戸地方の幼少期の女の子の遊びとしては「ままごと、お手玉、手まり、おはじき、羽根つき、鬼ごっこ、かくれんぼ、草履かくし、お山のお山のおこんさん、子を取るとろ」⁽¹⁸⁾などがあり、他に手まり歌、数え歌、姉さま人形作り、かるた取り、お祭りの踊りのまねごとなどがあったようで、遊びの種類は多くはないが、子どもには子ども特有の世界もあったのである。

1.2 藤田東湖の死と水戸の騒動

水戸藩徳川斉昭の側近藤田東湖は、幕末の水戸藩の指導者の一人で水戸藩内の保守派、革新派の対立の調停役を買って出ていたが、冬が11歳の時、安政の大地震で亡くなっている。

母雪子が東湖の妹であるという関係から、当然のことながら、冬は幼少期に東湖をしばしば見かけている。戦前の『サンデー毎日』のシリーズ「生きてゐる歴史」担当の記者の質問に英雄は次のように答えている。

なにしろ遠い昔のことですから、伯父の東湖についてもくはしくはおぼえてをりませんが、今でも目に残つてゐるのは、そのころ伯父が開いていた私塾、不息軒と申しましたが、その塾へ袴を穿いて肩をいからして入つて行く姿でございます。伯父は二十貫、身長は五尺五六寸もあらうかと思われる大男で、色は黒く、頬は厚肉で、角ばつた顔でした。眉尻が少し上がつて、左の眉のつけ根にほくろが一つございました。普通前ごみだつたといはれてゐますが、なかなか、さうではございません。りゆうとした姿勢で、眼光人を射ると申しますか、伯父の眼はよく光る恐ろしい眼でございました。私のおぼえてゐる伯父はいつも總髪で、總髪は隠居か醫者でない限り普通の人間はやらないものです。伯父もこれを好んでやつてゐたとは思へません。何かわけがあつたのでございませう⁽¹⁹⁾

記者は、東湖が私塾を開いていたのは、東湖の謹慎中のことで、あえて總髪にしていたのだらうと推測しているが、英雄は東湖についてさらに次のようにも語っている。

伯父はよくお酒を飲み、始終、碁を打つてゐました。その相手には川崎六郎といふ宿屋の主人がよく出入りしてをりました。またいつのころでしたか伯父が父とお酒を飲んでゐる時、私が障子の隙間から中をのぞいたら伯父が、即座に指を目にあてて、あの光る目でアカンベをしたことをおぼえてをります。私が驚いて逃げると、伯父は大聲に笑つてをりました⁽²⁰⁾

おそらくこれは冬の幼児期の出来事であろうが、後に英雄は「藤田東湖の姪」ということで人々に関心を持たれ、特に鹿児島への長期出張時代には「東湖の姪」ということで畏敬の念を持って人々から仰ぎ見られることになる。

童門冬二の『西郷隆盛』⁽²¹⁾によると、安政元年（1854）、島津斉彬の参勤交代に際し、西郷は江戸に赴くことになるが、同年、西郷は樺山三円（資之）に連れられて、小石川の水戸藩邸にいた藤田東湖に会い

に行く。西郷ら尊王派の若者にとって東湖は尊崇する対象だったからである。

東湖は上機嫌で、「樺山よ、この偉丈夫がそばにおるかぎり、斉彬公は安泰だ」と語り、一目で西郷を気に入っている。西郷が27歳、東湖が48歳の時のことであるが、西郷にとって、憧れ続けていた尊王派の巨星に直に会えた喜びは大きかった。

西郷は、東湖を崇拝していただけに、会ったその年に、東湖が死んだと聞いたときは、部屋を駆け回って嘆き悲しんだといわれている。

北海道開拓に功績を残し、佐賀の乱では江藤と共に主導者となって、最期は処刑された島^{よしなげ}義勇(団右衛門)も東湖に学んでいる。島はまた一時期冬の夫小太郎に蘭学を学んだという話も残っている。

東湖の『^{せいきのうた}正気歌』や『常陸帯』は幕末の志士たちの間で幕府の目をはばかり密かに回し読みされ、愛唱されている。藤田東湖はいわば尊王攘夷派の教祖的存在だったのである。

西郷は常々身邊の者に「藤田東湖は第一級の人物だ」と語っており、東湖に憧れていた鹿児島の志士たちにとって、東湖は特別な存在だったのである。

安政2年(1855)10月2日朝4時頃、荒川下流を震源地とする大地震が関東地方を襲うが、冬は水戸でも大変な揺れだったことを語っている。冬の兄力太郎は、父治兵衛(幾太郎)が江戸に出ていたため、父の身を案じてすぐに江戸に発つが、幸い父治兵衛は無事であった。

しかし、伯父東湖が小石川の水戸藩邸で梁の下敷きになって圧死したことを知り、力太郎は伯父の亡骸を長持に入れて水戸まで持ち帰っている。英雄は語っている。

その時伯父の母(幽谷夫人)梅子も一緒に藩邸にみたのですが、地震で一旦逃げ出したものの、部屋の火を消して来なくてはと、また引返さうとするのを「お母さん、危ぶない、私が代りに行かう」と伯父が抱きとめたその時、梁が落ちて来たのだと聞いてをります⁽²²⁾

東湖の死は、水戸藩の人々を悲しませただけでなく、尊王攘夷派の志士たちに大きな衝撃を与えたが、母の身代わりとなって死んだということは、後々まで人々の間で語り継がれている。

冬の幼少期、東湖の子どもの大三郎や小四郎は東湖夫人里子に連れられてよく桑原家に泊まりに来たようである。小四郎は冬より二つ年上である。

子供の時、鬼ごっこなどをしても、井戸の中へ隠れ込んだりして、随分危ないことをする人でした⁽²³⁾

色は白く、キビキビと、大膽で、いわば才子です。天狗騒動の少し前でした。藤田の家から小四さんをあづかつて呉れとたのまれましたが、宅(注;豊田家)ではあづからず、私の生家桑原家であづかったことがございました。これも多分、藤田で小四さんを持てあましたからではないかと思います⁽²⁴⁾

幕末の水戸では、家老の市川三左衛門を首領とする保守門閥派の諸生党と、斉昭の藩政改革を支持する改革派の天狗党があり、両者は幕末から維新直後まで凄惨な闘争を繰り返している。水戸藩は他藩に先駆けて尊王攘夷運動を主導しながらも、この対立抗争によって、有能な人材の大半を失ったといわれている。

東湖の死後、さらに天狗党は鎮派と激派に別れている。加藤木賞三、桑原治兵衛、豊田小太郎、桑原力太郎などは鎮派に属し、筑波山で挙兵する、藤田小四郎や田丸稲右衛門らを指導者と仰ぐ一派は激派といえよう。ただ、鎮派、激派といっても、その根は同じで近い関係にあり、藤田小四郎は筑波山で挙兵する直前まで冬の実家桑原家に滞在していたのである。

そのころ小四郎さんは桑原の家から毎日辯當持ちで彰考館へ通つてをりましたが、そのうち暇乞ひもせずに出奔して筑波山に立て籠つたのでした⁽²⁵⁾

その時水戸は大変な騒ぎでした、私達の家にもあんな弾丸（注；床の間に置かれた大小の弾丸を指さして）が飛び込んで来る始末です⁽²⁶⁾

危険ですから、姑と幼い弟を連れて弘道館宿舍へ避難いたしました。その時嫁入道具の一つとして持つて来た薙刀をかついで逃げたことをおぼえてをります。騒動は約一年たらずでをさまりましたが、随分恐ろしい目を見ました⁽²⁷⁾

冬らもまさに幕末動乱の渦中に身を置かざるを得なかったのである。英雄のいう天狗党の挙兵は元治元年（1864）3月27日のことである。また、水戸での騒乱は、同年8月、藩主慶篤の名代として宍戸侯松平大炊頭が水戸城に向かうが、軍勢の中に武田耕雲齋一党がいるということで、水戸城にいた市川、朝比奈など門閥派が拒否し、水戸城下でも戦闘が開始されたことを指す。

舅天功は1月に亡くなっている上に、夫小太郎は国事で留守がちであったために、冬の不安は大きかったが、この戦いは10月にはようやく鎮まり、弘道館宿舍の小松崎家に避難していた冬の家族は再び七軒町の家へ戻っている。

しかし、豊田家は、同年11月2日、豊田家から小松崎家の養子となり、弘道館に勤務していた、小太郎の弟司馬四郎がハシカのかじれで亡くなり、同年同月23日、姑が腸チフスで亡くなるという二重の悲劇に見舞われている。

天狗党は、京都にいた徳川慶喜を頼って、いわゆる「長征」を企てることになるが、慶喜を「我が方」に動かすことはなく、敦賀で諸生党と幕府軍に包囲され、ついに、元治元年（1864）12月17日、加賀藩に投降する。

幕府は、天狗党の処罰については、各地で似たような事件が起こることを懸念したため、首謀者の武田耕雲齋、田丸稲右衛門、藤田小四郎を処刑するだけでなく数百人を斬首する。また、耕雲齋らの首級は塩漬けで水戸に送られ、4月20日（旧暦3月25日）から3日間水戸城下を引き回され、その後那珂湊で晒されている。

このことは水戸の住民や天狗党関係者に大きな衝撃を与えたが、当然のことながら、冬は身内の人々の無残な姿を見に行く気にはなれなかった、と語っている。また、武田耕雲齋の息子彦右衛門に嫁し、この事件に否応なく巻き込まれた、叔母幾子の悲劇については次のように語っている。

この騒動で殊に哀れなのは叔母の幾子（注；東湖の妹）でした。夫武田彦右衛門は耕雲齋の長男で、そのため捕へられて刑死されました。その時幾子叔母は姑や弟妹達と一緒にとらへられましたが、叔母だけが他姓であるからといふので命は許されるはずでしたが目前姑や弟妹を見殺しには出来ない、自ら断食をして牢死いたしました⁽²⁸⁾。

この幾子については、入牢中、3人の子どもに論語を教えたという逸話が残っている⁽²⁹⁾。3人中一人くらは命を助けられるかもしれない、その時学問がなかったら困るだろうということで論語を教えたのであったが、結局、子どもは3人共処刑されてしまう。幕末から明治維新直後まで水戸では報復が報復を呼ぶ凄惨な殺し合いが繰り返されたのである。子どもらの処刑から6ヶ月後、慶応元年（1865）9月24日、

幾子は牢死する。

藤田東湖の子どもの中でも藤田健二郎や大三郎、冬の兄力太郎や夫小太郎は天狗党激派に同情を寄せながらも鎮派の立場を保っていたが、鎮派とはいえかなり積極的に国事に奔走しているため、冬らもいつ同じような運命になるかと恐れたり、覚悟を決めたりしながら、日々の暮らしをしていたのである。

2. 結婚と夫の遭難、暗殺

冬が語るところによると⁽³⁰⁾、冬が結婚したのは、父治兵衛が亡くなった翌年の文久2年(1862)6月28日であり、相手は豊田天功の長子小太郎である。冬が18歳、小太郎が29歳の時である。

存命中の父治兵衛と天功との間で、冬と小太郎を結婚させる約束ができていたのである。媒酌人は東湖の娘婿久木直次郎である。

豊田の家族は、小太郎の結婚前は彰考館官舎に住んでいたが、婚礼を挙げるために大町山野邊邸を借りて住み、文久3年(1863)暮れには下市七軒町に移っている。

冬が舅天功に仕えたのは1年半余りの短い期間である。天功是最晩年胃癌を患いながらも決して病態を見せず、「大日本史」の原稿を夜遅くまで精力的に書き続け、冬がいつ目を覚ましても水漬をすすりつつせせと筆を運んでいた⁽³¹⁾。豊田家と遠縁の根本 正(後に未成年者の禁酒・禁煙を唱えた政治家)が天功の家僕となったのもこの頃のことである。

豊田天功は、名が天功、諱が亮、通称が彦次郎、号は松岡あるいは晩翠と称している。天功は文化2年(1805)久慈郡坂野上村(現里見町)の庄屋豊田清三郎信卿の次男として生まれている。文政元年(1818)、14歳の時藤田幽谷の門人となり、翌年東湖と江戸に出、儒学を亀田鵬斎と太田錦城に、剣術を岡田十松に学んでいる⁽³²⁾。

また、英雄が言うように⁽³³⁾、天功は天保12年(1841)に水戸藩に仕えるようになり、後、彰考館に勤務し、安政3年(1856)には彰考館総裁となっている。天功は「仏事志」、「兵志」、「刑志」、「食貨志」などを仕上げている。また、「北島志」、「北虜志」、「靖海全書」などもあり、「靖海全書」の中には「海防新策」、「合衆国考」の付載等もある。

天功は儒学者であり、日本史家であるが、その視野は海外にまで及んでいるのである。ともかく、天功は幕末水戸藩を代表する指導者の一人であり、学者であるが、齊昭は天功を「国の宝」と称している。

冬は結婚後も優れて知的な環境に身を置くことができたのである。天功と冬の間には次のような歌のやりとりがある⁽³⁴⁾。

杖つくもいかぬもわれは思ひきや六十路の坂を今日越えんとは

君のつく六十路の杖は千代の坂かねて越ゆへきためしなるらむ

病状の進んでいた天功は、この歌を詠んだ翌年、元治元年(1864)1月21日、亡くなっている。天功は亡くなる直前小太郎を枕元に呼び「さらに学問研鑽を励めよ」と言い残している。同年3月15日、家督は長子小太郎が継いでいる。小太郎には150石が与えられている。同年6月1日には、小太郎は大番組となり彰考館総裁代を兼ねるようになる。

高橋清賀子が指摘しているように⁽³⁵⁾、天功の学問に対する情熱はその子小太郎と嫁の英雄に受け継がれていくのである。

冬の夫小太郎は豊田天功の子として天保5年（1834）3月1日に生まれている。小太郎は天功の子どもだけに幼少の頃からその俊才ぶりが知られていたが、冬が結婚した頃には、国事にに関わりながらも彰考館の仕事にも精を出し、著作物なども手掛けていた。政治的には激派のような超過激派ではなかったが若い頃からかなり熱心に政治的活動にも関わり続けている。

冬の結婚生活は4年余りで短いが小太郎は冬の生涯に決定的な影響を与えている。その略歴については以下のようなものである。

小太郎は天功の長子として天保五年（一八三四）に生まれた。名は靖、香窓、十竹舎を号した。小太郎は通称である。父天功を助けて『大日本史』の史料収集や外国事情の調査に努め、藩命により蘭学を学んだ。万延元年（一八六〇）彰考館に入り、『大日本史』編集を命ぜられ、元治元年（一八六四）三月には父の跡を継いで一五〇石を賜い、同年六月には彰考館総裁代となった。彼は、偏狭な攘夷を排して開国を主張し、それがため慶応二年（一八六六）九月、京都で暗殺された。時に三三歳⁽³⁶⁾。

また、豊田 伴編『豊田香窓先生年譜略、完』から追記すると、安政5年（1858）12月22日大島高任に就いて蘭学修業をすることが命ぜられ、安政2年（1855）9月9日再び下間良弼に就いて蘭学修業をすることが命ぜられている⁽³⁷⁾。

この前後の事情については「新聞 いはらき」においても英雄が詳しく述べている。伴編の年譜略による記述も参考にしながら要約して示すと以下のようなものである。

安政3年（1856）に下間良弼がその役を降りると、栗原唯一が代わって教えるようになるが、蘭学研鑽4年を経て小太郎は『航海要録』の訳述を完成し、安政4年（1857）6月天功がそれを前藩主の烈公齊昭に上程すると、齊昭は天功に「伴航海録よろしく出来令感心候、伴も中々才子と存じ候」とお誉めの言葉を与えている。

安政3年（1856）6月26日、小太郎は御床几廻りを命ぜられ、同日鈴木安太郎豊大と共に洋学世話掛を命ぜられている。

安政4年（1857）6月10日には大日本史志類中の天文音楽取り調べを命ぜられ京都に上っている。当時わが国は開港条約に関して紛糾していたが、小太郎は憂国の情から在京中密かに池内大学を頼り、青蓮院宮と三條公に対し「姑息なる和議を排し戦闘の覚悟を以て彼に對せねばなるぬ」という攘夷派的な建白書を呈している。

天功は、同年8月14日付の手紙で小太郎に天文志料調査に精励するよう諭しているが、父の目からは小太郎の行動に不安も感じていたのかもしれない。小太郎は同年10月水戸に帰るが、在京時の行為は、若輩後進の身で不東なりということで、帰藩後1カ月の謹慎を命ぜられている。この時小太郎24歳である。

小太郎はこの時は京都に4カ月間滞在しているが、史料収集の傍ら、勤皇の僧月性（薩摩瀧に西郷と身を投じた僧月照とは一字違いの別人）、梁川星巖、頼 三樹三郎ら、最も過激な勤王派の志士たちと交流を結んでいる。

月性は勤王の志士たちに愛唱された次の詩を作ったことであまりにも有名である。詩と読み下し文は以下のとおりである。

男児立志出郷関
学若無成不復還
埋骨何期墳墓地
人間到处有青山

男児^{なんじこころざし}志を立てて郷関を出づ
学、もし成るなくんば、また還らず
骨^{うず}を埋む、何ぞ期せん墳墓の地
人間^{じんかん}到る処^{せいざん}青山あり

月性は安政4年(1857)閏5月28日付の入江九一(別名杉藏。高杉晋作、久坂玄瑞、吉田栄太郎と共に松下村塾の四天王の一人。入江兄弟は松陰が最も信頼し可愛がった弟子である。兄九一は禁門の変に際し、鷹司邸で自刃する。弟は後に内務大臣となる野村 靖である)宛の書簡で、水戸の豊田小太郎が同藩の清水某と上京来訪し、議論相磨いたと述べ、追伸で、わざわざ豊田小太郎は一人物である、賢弟(野村 靖)にもこのことを伝えるようにと述べている。

野村は、木戸孝允らと共に、明治9年(1876)12月、精養軒で行われた松野 磧とクララの結婚披露宴出席者13名中の一人である。

京都大学附属図書館維新資料画像データベースの「資料#0126900の参考引用文献」(出典『尊攘聚英解説』) ページの手紙部分全文は次のとおりである(注;下線部分前村)。

この手紙は追伸で頼 三樹三郎、梅田雲濱、池内大學など、幕末の勤王派の重要人物の名前も挙がっており、幕末の志士たちの動きの一端を知る上で重要な資料の一つである。

拝啓今日より入暑ニ候へとも、御満堂皆々様益御多祥可被奉賀候。二ニ狂生無事過ル十五日歸國御免の一紙下り、追々歸装モ出来、いよゝゝ來ル朔日頃より下坂と相決候。此頃ハ藤森翁姫路より歸路過京滞留、野田笛浦モ滞京、日々二翁ニ周旋致居、水戸豊田小太郎モ同藩清水某と同來京、是モ度來訪被致、議論相磨候。大津の出生矢野義太郎ト申ス天朝家モ、此間已來三度ハカリ來訪、大ニ論し候。外ニ肥後の松田某モ兩度來遊、是ハ御賢弟知己の由ナレトモ、其爲人スコシ可怪様ニモ相見へ候。明日者關白殿下諸太夫白井何某より被招、本山家老同伴ニ而參候筈ニ候。扱而一變事ハ蝦夷地方箱ダテ近傍五十万ツボ、本山ヨリ開田人ヲ種え、寺ヲ建候様ニ幕府免許有之、此節松井中務ナド其カ、リニ相成り、使僧四人の内え狂禿ヲ加へ申出ニ相成り候由、兩三日中ニ其詮議相決候へハ、歸國をヤメ直ニ北地へ飛錫セズテハ不相濟ト、只今松井方より内移り候。此事又々御報知申上候。執三四日中ニ其命下り候ハ、又々可申上候へとも、ちよと一口申上置候。先ハ此變申上度、早々頓首

後五月廿八日 月性

杉賢契 侍史

明日午後ハ三樹、月並樓ニ而頼宗匠梅田巽池内、其外諸儒先生、狂生ヲ飲錢ト申ス約アリ、西歸の別酒カ北遊の別レニナリソヲニ相成り、水戸豊田小太郎ハ一人物ナリ、御賢弟へ御傳へ可被下候。藤森播州大當り士氣ヲ鼓舞候由⁽³⁸⁾。

月性は周防國妙圓寺の本願寺派の僧であるが、勤皇の志厚く、同じ志を持つ志士・文人と広い交遊があった。この書簡の解説の前半部分は省略するが、後半部分は以下のように綴られている(注;下線部は前村

による)。

月性は上京以來志士・文人との交遊益廣く、盛んに國事を慷慨し、詞章の論を闘はした。而して此の書状に依つても亦、斯かる志士・文人の動靜の一斑を察知することが出来る。藤森翁とは藤森大雅、肥後の松田某とは松田重助を指し、追書には頼三樹三郎・梅田雲濱・池内大學等が月性の為に送別の宴を張らんとする旨を記してゐる。又野田笛浦は丹後の人にして古賀精里に學び、詩文の名聲頓に顯はれ、安政六年七月、六十一歳を以て没した。豊田小太郎は水戸藩の儒者豊田天功の長子にして、幼時家學を修め、更に文武兩道に勵んで識見を擴め、安政四年京都に赴いて修史資料の天文・音樂に關する事項の蒐集・調査に當つてゐた。月性は九一に對して小太郎の人物を稱揚し、更に九一の弟野村靖に其の事を傳ふべしと囑したのである⁽³⁹⁾。

月性は北海道に赴くことはなく、安政4年(1857)秋、周防に歸っていたが、本願寺の招きにより再び上京する直前の安政5年(1858)5月、病気で急死している(毒殺という説もある)。

頼三樹三郎、梅田雲濱、梁川星巖、池内大學は幕閣からは「悪謀の四天王」と呼ばれていたが、梅田雲濱は安政の大獄の最初の逮捕者となり、安政6年(1859)9月14日、幽囚中、病死する。享年45歳。頼山陽の三男、頼三樹三郎は安政の大獄で逮捕され、安政6年(1859)10月7日、江戸小塚原刑場で斬首される。享年34歳。池内大學は公家の子弟の教育係を務めたことから、公家方とも交流があり、徳川斉昭とも親しく、斉昭の攘夷運動にも協力している。大獄の際、直弼に自首したことにより軽い刑で済むが、後にそのことが因で、「人斬り以藏」こと岡田以藏に大阪で殺害される。享年50歳である。

この手紙にはたまたま登場していない、「四天王」の一人梁川星巖も逮捕されるはずであったが、逮捕三日前、コレラで死去している。享年70歳。梁川は詩作の名手であったことから巷では「死(詩)にじょうず」と評されることになる。

小太郎は、水戸藩内では一応穩健改革派の立場をとっていたが、京都ではこれら尊王派の超過激な面々と親しく交流していたのである。

この後も小太郎は水戸と江戸を度々往復したり、安政6年(1859)3月14日には仙台藩で開成丸を見たり、文久元年(1861)には江戸の箕作塾、昌平黌などにも出入りしたりと行動的である。

ただ、体はあまり丈夫でなかったようで、結婚した翌年の文久3年(1863)1月26日には緒方洪庵の診療を受けるために江戸へ赴き、3月22日、水戸へ戻っている。約2カ月間の治療を受けたようである。また、慶応元年(1865)には病氣療養のため伊豆、信濃に出かけている。

元治元年(1864)6月24日には、小太郎は藩政改革のため戸田忠則、藤田健らと嘆願書を持って江戸へ行くが彼らの願望がかなうことはなかった。慶応2年(1866)には同志の萩野谷富三郎に密書を託して江戸に向かわせたが途中で捕らえられ、密計が暴露し、冬の兄力太郎も捕らえられている。

もともと蘭學を学び世界の事情にも詳しかった小太郎は単なる攘夷論から「変通論」を唱えるようになり「若し西洋を夷狄とするならば漢土も亦夷狄でなければならぬ。然し例え夷狄たろうともその長ずる所を採つて我の大を成すに何の不思議あらん」⁽⁴⁰⁾といわゆる尊王開國路線へと進み「更に開國進取の大計を定め以て我國を世界競争場裡に立たしめ、遂には我が國をして世界の京師たらしめねばならぬ」⁽⁴¹⁾と主張するようになる。

慶応2年(1866)6月9日、ついに小太郎は渡井量蔵、加藤木賞三(吉村昭は桜田門外の変の陰の首謀者といっている。英雄の弟政は、後、加藤木の5女と結婚する)らと共に脱藩し江戸に逃走する。脱藩に際し、小太郎が冬に残した最後の言葉は「心を鬼にしておれよ」である。おそらく、どんなことがある

うと凜としておれ、というほどの意味を含んでいるのであろうが、いくら武家の女性とはいえ一人取り残される22歳の若妻には辛い言葉である。間もなく小太郎は江戸から京へ上っている。

小太郎の脱藩上京の目的は尊王開国の主義を貫くことと京都本圀寺（注；当時この寺は西本願寺の北側に位置した日蓮宗四本山の一つで大寺であったが、昭和44（1969）年、山科に移っている）にいる水戸藩士と連携して藩政改革を図ることであった。また、水戸の門閥派に襲われる危険性が迫っていてそれを避ける、という事情もあったのである。

本圀寺党と称される水戸藩士たちは、京都に水戸派の一大勢力を築くことを目指した、天狗党に連なる一派である。

本圀寺党は尊王攘夷を旗印とするが、新撰組の初代局長となった芹沢鳴なども元天狗党で熱烈な尊王攘夷の思想の持ち主であり、本圀寺党との繋がりも完全に切れているわけではなかった。芹沢は、文久3年（1863）9月16日、新撰組の仲間に暗殺されるが、一説によると、乱暴狼藉をその理由とするのは表向きで、京都守護職の松平容保や、佐幕派の近藤勇らにとって、芹沢は尊攘思想に傾き過ぎた厄介な人物であった、ということを経験の理由としている。

つまり、芹沢は政治的理由による内ゲバで殺されたということであるが、ともかく新撰組の身内から芹沢を消すことで、近藤ら新撰組は、佐幕派としての純度を高めることに成功するのである。

京都では、小太郎は以前弘道館において蘭学を学んだことのある栗原唯一の所に身を寄せていたが、この機会にも再び青蓮院宮に上書をしたり、志士たちとの交流をしている。

慶応2年（1866）9月2日、本圀寺へ出かけるという小太郎に、栗原は「到底天狗黨に尊皇開國論を説いたところで無駄だから本圀寺へ行くのはよせ」⁽⁴²⁾と言って引き留めるが、生真面目な小太郎はそれを振り切って本圀寺へ向かう。栗原のいうとおり、本圀寺党の面々は小太郎の尊王開國論を理解できるはずもなく小太郎を佐幕派と曲解し、本圀寺脇堀川通りの四つ角で暗殺する。水戸藩は維新後の日本で大きな活躍をしたであろうと思われる人物をまたひとり自らの手で抹殺したのである。

小太郎を殺害したのは一人であったか、二人であったか、あるいはそれ以上であったかは不明であるが、「京都大学附属図書館維新資料画像データベース」の資料によると、水戸藩郷士某（注；あえて名前は伏せる）は豊田小太郎殺害の嫌疑で捕縛され、水戸の獄に入れられるが、後に特赦によって許され、明治4年（1871）2月、62歳で没した、とある。小太郎暗殺の凶報はすぐには水戸に届かなかったようである。

水戸の山の方に菟蓐を作るところがありますが、その菟蓐屋が京都まで商ひに行つて京都でこの話を聞いて、知らせてくれたのだそうです。しかし家の者は私にだけはこの話を随分永い間隠してをりました。私の落膽するのを案じたためでせう⁽⁴³⁾

夫の安否が分からないまま、同年12月12日には夫の弟輝が、翌年の慶応3年（1867）3月1日には夫の末弟の達がチフス⁽⁴⁴⁾で亡くなっている。この当時冬らは七軒町から上市裡五軒町に移っていたが、冬は豊田家にただ一人となったために、実家の桑原家（現在の水戸芸術館付近）に移り住んでいる。豊田家の存続については、水戸徳川家の計らいもあって、美雄は小太郎の弟友徳（司馬四郎）の子伴5歳を引き取って嗣子とし養育することになるが、これは美雄と小児養育との出会いとなる。

小太郎からは音信不通の状態が続いていたために、冬も夫の身に何かあったのではないかということは薄々気づいていたようであるが、小太郎の死からやや間を置いて、兄力太郎あたりから暗殺の事実が伝えられたのであろう。冬は夫の暗殺からおよそ一年後、慶応3年（1867）9月27日、夫豊田小太郎を追悼する長文をしたためている。

3. 学問研鑽と教育者への道

先の『生きてゐる歴史』では、夫の死後、冬は英雄という名前を用いるようになったとしている。後年には男子と間違われやすいということから英雄子や冬子を名乗ったりしたことはあるが、この時期わざわざ英雄を名乗るようになったのはもちろん夫の遺志を継ぐという覚悟を表すためである。

英雄は「私は慶應三年から明治初年にかけて孤獨の寂しさと亂世の怖ろしさにあるかなきかの思ひで暮らしました」⁽⁴⁵⁾と語っているが、英雄の英雄たる所以はこれに続く以下の口述が示している。

(・・・あるかなきかの思ひで暮らしましたが)斯くてあるべきにもあらず、殊に夫小太郎の報國の念燃ゆるが如きも中途にして斃れたので私は女ながらも、これを紹がねばならじと、實家の父より受けた四書五経や、和書を繰返し、桑原家に同居してからは實兄力太郎にも就いてひたすら勉強いたしました⁽⁴⁶⁾。

私は明治元年の末頃から向井町片町の川崎巖といふ人の家塾に通ひ漢籍を學びましたが、當時未だ亂世の餘燼さめぬ折でしたから、私は毎夜懷劍を帯にたばさみ、提灯はわざと持たずに、通つたのでした、これが前後三年も續きました。無論當時は再婚を勧める者が數多ありましたが、私は女子の本分はそんなことには無いと思ひまして始めから悉くを拒はりました⁽⁴⁷⁾

英雄は知性と美貌の持ち主であり、志操堅固であったことから、いい縁談もあったようであるが、それらをすべて断り97歳で死ぬまで寡婦を通してゐる。

明治維新が成り、版籍奉還がなされると秩録処分が始まり、それまでいくらか余裕のあった中級、上級の武家の家計も、生計を営まなければ一律に火の車となった。秩録処分に代表される武家社会の崩壊という社会の急激な変化は、英雄にとっても、ずいぶんとこたえたようで「その為の心的心勞物質的苦痛は到底現時の若い方々にはお解りになりますまい。その間にか弱い寡婦としての私の苦痛は皆様の御察しにお任せ致します」⁽⁴⁸⁾と語っている。

水戸でも、一時金を手にした、かつての武士たちは、いわゆる武家の商法に手を出して失敗したり、遊興費で使い尽くしたりで、生計が立たず完全な失業者となった者も少なくないのである。

英雄は、明治3年(1870)、近隣の子女を集め和書や漢学の初学を教えるようになる。英雄は塾の経営者、指導者となったのである。教育者豊田英雄の誕生である。

英雄の塾は3年後には、生徒の数が2、30名ほどになったが、明治6年(1873)、以前に没収された豊田家の跡地に、茨城県立發桜女学校(女子小学校)が創設されることになり、英雄が教師として呼ばれたため、英雄は塾の生徒を引き連れてこの学校の教師として就任することになる。

茨城県の最初の女性教師は、明治5年学制発布と同時に、寺子屋の師匠から小学校教師となった黒沢登幾(水戸藩勤王の烈女)とされているが、英雄も黒沢に1年遅れただけであるから、茨城県内の最初期の女教師の一人となったのである。

「發桜」という名称は東湖の漢詩「正気歌」中の「^{ひら}發いては^{ばんだ}万朶の桜」からとったそうである⁽⁴⁹⁾。英雄にとっては、学校の場所も名称も、縁の深いものだったのである。この学校の教師となったことで豊田英雄は教育者として第二幕を迎えることになる。

高橋清賀子家文書の中には發桜女学校時代の豊田英雄の「發桜女学校内則(緒言)」が残されている。これは当時の女子小学校に関する重要な資料であるが、東京女子師範学校教師として抜擢される前の英雄

の教育観を垣間見る上で、他にない貴重な手掛かりともいえるので、以下、緒言を取り上げることにする。

女学校内則緒言

- 凡女兒小學ノ則タル悉ク具ル不能ト虽女學ノ嗜タルソレ畜ニ其一身ニ學藝ヲ得ルノミニアラス他日育幼ノ重任アレハ也故ニ精を學業ニ励マシ豫テ教ルニ貞順正義志操濃ヤカニ容儀品行ヲ閑雅ニシ都テ女子タル者ノ耻ツヘキ醜行不可有ヲ標目トナシ得ヘキヲ期ス
- 凡校内ノ生徒互ヒニ禮讓ヲ基トシ校則ヲ守リ教師ノ指令ヲ忽ニス可ラス

退疎暴ヲ誠メ衣服姿容品行ヲ正シク奢侈淫ホハ特ニ風化ニ關シ學行獎勵ノ害モ亦多ナラン故ニ校則一層服膺スヘキヲ要

干時明治七年第六月上浣

發櫻女學校教師

豊田英雄謹誌⁽⁵⁰⁾

当時の状況からいって、在学生の年齢幅は大きかったと思われるが、「發櫻女學校」は、後の中等学校としての女学校ではなく、英雄が緒言冒頭でいうように女兒小学校（女子小学校）である。英雄は、女子小学の本来的な趣旨を「畜ニ其一身ニ學藝ヲ得ルノミニアラス他日育幼ノ重任アレハ也」ということに置いており、いわゆる良妻賢母育成型の教育を考えている。

もちろん、今だから良妻賢母育成型の教育は古いといえるが、当時の先端的知識人層でも女性に対する期待を「良妻賢母」に置いている例は多く、東京女子師範学校設立の趣旨などもこの線に沿っており、当時、女子教育の必要性をここまで明確にとらえていることは注目すべきである。

英雄が、中村正直や関信三のように、男女同権を語り、女性の社会的進出を唱える人々に出会うのは、東京女子師範学校教師として抜擢されて以降のことである。

倉橋惣三は、昭和3年、幼稚園教育史執筆の史料収集の目的もあって、水戸の豊田英雄宅を訪れており、各種の史料の提供を受けているが、英雄の辞令類（全て高橋清賀子家文書）の写真と文書を『幼児の教育』に掲載している⁽⁵¹⁾。英雄は、明治8年（1875）11月29日、開業前日に東京女子師範学校の読書教員となることが決まるが、おそらく同年10月末頃までにはその話があって、11月6日、茨城県に倉橋が紹介している次のような辞職願いを出している。

辭職之儀願

發櫻女學校教員 豊田英雄

今般私儀少訓導試補拜命難有仕合ニ奉存候然處萬般未熟其任ニ兼堪候間斷然御免相願度此段御聞濟可然偏ニ奉懇願候也

明治八年第十十一月六日

豊田英雄 印

茨城縣權令中山信安殿

この願いに対し、11月9日、倉橋が紹介している別の辞令で茨城県は英雄に次のような回答を与えている。

願之趣難届聞候條勉勵致事

茨城
縣

明治八年十一月九日

その後、東京女子師範学校側の働きかけもあって、11月20日、ようやく次のような辞職許可が降りている。

豊田伴母

豊田冬

東京女子師範学校ニ於テ雇入相成為ニ付至急同所出頭可致事

明治八年十一月

茨城県 印

発桜女学校の後任には久貝みえが迎えられることになり、残る教え子たちに最後の訓示を与え、英雄は晴れて上京できることになる。

東京女子師範学校の教員として、英雄と同時に抜擢されることになった棚橋絢子の場合も、愛知県の対応はまったく同様である。当時、棚橋は名古屋の明倫校女子部の桃夭女学校（女子小学校）で校長をしていたが、絢子は、夫大作を介して、愛知県の師範学校長伊澤修二と知己があり、小学校教師の傍ら伊澤夫人に学問を教授していた。

伊澤は、かねてから絢子に東京に上ることを勧めていたが、自身が東京に戻ると、棚橋を開校予定の東京女子師範学校の教師として推薦している。

文部省は、愛知県知事に東京女子師範学校で棚橋を採用したい旨連絡し、同意を求めるが知事は棚橋が知らないままにこれを拒絶する。このことを知った、これまた夫を介しての知己、名古屋の官立外国語学校校長吉川泰次郎はカンカンに怒り、知事と直談判をする。

しかし、棚橋の辞職を認めるにしても、いったん、県が文部省に正式に断りを入れているため問題はあったが、たまたま女子師範学校長を兼任していた小杉恒太郎が吉川と同郷ということもあって、連絡調整の上、棚橋の採用も本決まりとなる⁽⁵²⁾。

茨城県も、愛知県も、二人の抜擢人事に水を差しているようにも見えるが、県側としてはまたとない人材を手放したくなかった、というのが本音であろう。当時は、男子教員でさえ適任の人物を得ることが難しかったが、女子教員となると至難の業だったからである。

天功の家僕で、小太郎の学僕であった根本 正は、少年時代に20歳前後の冬を間近に見た人であるからその冬評は的確である。根本は冬について次のように語っている。

余は豊田小太郎先生の令夫人として二十歳なりし當時より、其の家に仕へたるを以て女史が非凡の性質を有し、能く其の賢母に孝道を盡され、當時妙齡に在りたる時に於いても夜は深更まで燈火を剔りて讀書勉學せしを知るなり其等は今を去る六十有餘年の昔なり

女史の英敏篤學は天性たりしと雖も、女史を奨励したるものは、その血族が皆學識卓見の名家たるが故なり。藤田幽谷先生は女史の祖父なり。女史の母君は東湖先生の妹なり。其の他吉田、久木の兩叔母君は何れも東湖先生の姉妹にして亦母君の姉妹なり。女史は幼少の時より此等の人々と詩歌文章

の交換を為し、余は其の書簡の使者として、恰も今日の郵便配達夫の役をも勤めたり⁽⁵³⁾。

豊田英雄の前半生は、想像を絶するほどの試練に満ち、波乱に満ちたものである。英雄は度重なる不幸に遭遇しながらもそれを一つ一つ乗り越えている。また、それだけでなく英雄は「女に学問はいらない」とされた時代に、学問の厳しさと楽しさに目覚め、学問を通して自らを鍛え、成長させ、後にすばらしい教育者、保育者となる素地作りをなしている。

そのプロセスに、英雄の天性の素質と、優れた家庭教育環境と、そして夫の遺志を受け継ぐ強い意志とが反映していることはいうまでもないだろう。

〔注〕

- (1) 安省三『豊田英雄先生の生涯』、茨城県幼稚園長会、昭和32年、p.2
- (2) 茨城県立歴史館編集『東京都多摩市高橋清賀子家文書目録—豊田天功・小太郎関係文書一』、1995年、pp.122-123
- (3) 同上、p.120、(前田香径著『烈公の神発仮名と幕末志士の隠し名に就いて』、昭和15年)
- (4) 「新聞いはらき 英雄號」、いはらき新聞社、大正14年12月17日
- (5) 同上
- (6) 同上
- (7) 漆畑直松「松陰北辺の旅」、『松門4号』、昭和62年3月1日。
<http://www9.ocn.ne.jp/~shoukai/shoumon/4gou.htm>
- (8) 上掲、「新聞いはらき 英雄號」
- (9) 同上
- (10) 同上
- (11) 山川菊栄『山川菊栄集 10』、岩波書店、1981年、pp.7-8
- (12) 同上、p.25
- (13) 上掲書、安省三、p.3
- (14) 同上、p.8
- (15) 中村武羅夫『傳記 棚橋絢子刀自』、婦女界社、昭和13年
- (16) 東京都『東京の幼稚園』、東京都、昭和41年、pp.183-184
- (17) 横川椋子の両親宛の手紙、八王子市郷土資料館、明治11年12月6日。
- (18) 上掲、山川菊栄、pp.78-93
- (19) サンデー毎日編集部『生きてゐる歴史』、教材社、昭和15年、p.2
- (20) 同上、p.2
- (21) 童門冬二『西郷隆盛』、成美堂出版、昭和62年、p.45
- (22) 上掲書、サンデー毎日編集部、p.3
- (23) 上掲書、サンデー毎日編集部、p.4
- (24) 同上、p.4-5
- (25) 同上、p.5
- (26) 同上、p.5
- (27) 同上、p.5
- (28) 同上、pp.4-5
- (29) 上掲、山川菊栄、p.28
- (30) 上掲、「新聞いはらき 英雄號」
- (31) 同上
- (32) 上掲書、茨城県立歴史館編集、pp.109-111
- (33) 上掲、「新聞いはらき 英雄號」
- (34) 高橋清賀子編(稿)「豊田英雄先生略年譜」、渡辺宏編集『日本の保姆第一号 豊田英雄子先生と保育資料』(非売品)、崙書房、昭和51年、p.24

- (35) 高橋清賀子「豊田天功、香窓、英雄3人の業績」、『広報ひたちおおた12月号』所収、常陸太田市役所、2007年、pp.7-8
- (36) 上掲、茨城県立歴史館編集、p.111
- (37) 豊田 伴編『豊田香窓先生年譜略』、大正14年
- (38) 月性書簡／資料#0126900の参考引用文献(出典『尊攘聚英解説』)／京都大学附属図書館維新資料画像データベース／<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/ishin/kanren/do...>
- (39) 同上
- (40) 上掲、「新聞いはらき 英雄號」
- (41) 同上
- (42) 上掲、サンデー毎日編集部、pp.6-7
- (43) 同上、p.7
- (44) 渡辺宏編集『日本の保姆第一号 豊田英雄子先生と保育資料』（非売品）、崙書房、昭和51年、p.64
- (45) 上掲書、安省三、p.7
- (46) 上掲、「新聞いはらき 英雄號」
- (47) 同上
- (48) 同上
- (49) 島津利幸編集「藝文風土記 日本の保姆第一号 豊田英雄と水戸」、『常陽藝文』（3月号）、財団法人 常陽藝文センター、平成5年、p.2
- (50) 發櫻女学校内則、高橋清賀子家文書、明治7年。
- (51) 倉橋惣三「豊田英雄女史御慰安會に列して一併せて、貴重な幼稚園史資料の數々」、『幼児の教育』（第四十一卷第二號）、昭和16年2月。
- (52) 中村武羅夫、上掲書
- (53) 上掲、「新聞いはらき 英雄號」
- 注；豊田 政関係の情報については、Web上の「奉答文事件」、「ダイハツディーゼル株式会社」、「日本鉱業史料集」、「工部大学校資料」、「村山令藏」に関する各サイトを参照した。

※ なお、本稿執筆にあたっては、高橋清賀子氏、茨城県立歴史資料館、八王子郷土資料館のみなさまに大変お世話になりました。ここに改めて御礼申し上げます。